

シネマ日記



No. 59

○月×日 類人猿は生物学的に人間と同じ広義のヒト科に属するそうで、チンパンジーの遺伝子は人間のそれとわずかな違いでしかないらしい。アルツハイマー病の新薬開発に取り組み研究者が、実験用のチンパンジーに開発中の新薬を投与したところ、病気の改善どころか知能が高まったことに気づく。そこでアルツハイマー病で苦しむ自分の父親にも投与すると、同じ効果が得られた。ところが、そのチンパンジーは突然暴れ出し、射殺されてしまう。暴力的になったのは薬の副作用のせいと違いなく、危険な新薬とされ、開発は中止される。しかし、諦めきれずに、そのチンパン

ザーが獲得したのは高い知能の遺伝子だけではなかった。ある種のウイルスをも引き継いだのだった。しかし、そのウイルスは猿には免疫が働くものの、人間には確実に死をもたらす。猿が森へ帰っていった後のラストシーン、旅客機のネットワークが地球上、至る所に張り巡らされている様を描くが、文明の利器がまさに死のウイルスの運搬役を担っている。人間ではなく、猿の目線で描かれているのも新鮮で、人間社会がもたらした「文明」への強烈な批判が伝わってくる。

○月×日 サラリーマン人生を円満成就し、「これからは第二の人生を」と思った矢先、がんを告知されてしまう。残念ながら、身近によくある話。「エンディングノート」(砂田麻美監督)は、その69歳の父親が半年後に亡くなるまでの日々を、娘が撮影・監督したドキュメンタリーだ。ただし、単なる闘病記ではない。がんの宣告で、主人公の父親がまずしたことはエンディングノートづくり。家族が葬式などで困ることがな

じーが産んだ赤ちゃんを秘かに自宅に連れ帰り、シーザーと名付けて育てる。母親から特殊な遺伝子を引き継いだシーザーはヒトをも超える知能を発揮し始めるのだった。『猿の惑星 創世記』(ルパート・ワイアット監督)は、猿がなぜ地球の支配者となったのか、その謎解きの物語である。40年以上前のシリーズ第1作「猿の惑星」では、ケネディ宇宙基地から打ち上げられた宇宙船が宇宙で漂流のあけく、ある惑星に不時着するが、そこでは猿が支配し人間は奴隷にされていた。ところが、朽ちかけた「自由の女神像」を見つけたことで、なんとこの惑星は「未来の地球」だったというラストシーンの「落ち」が衝撃的だった。光より速く飛んだ宇宙船が未来を見てしまったのだった。今作は、その未来の「前日譚」である。人間の愚かさや愛想を尽かしたシーザーは、やがてチンパンジーの仲間のリダーとなって、知恵を発揮し、人間に戦いを挑み、自由を求め「森」へ帰っていく。だが、シー

いようにとのマニユアルだ。猛烈会社人間として、役員にまで上り詰めた彼の処世訓、「段取りが命」だからである。残された時間を前向きに生きようとする父それに応える家族。娘である監督の、ときにユーモアに満ちた語りがほのぼのとした感動を誘う。

○月×日 旧ソ連邦の小国キルギスの小さな村。電気工のおじさんの夢は手製風車で村中を明かりで満たすこと。その「明りを灯す人」(アクトン・クバト監督)は、電気代を払えない貧しい人には電柱に登って電線をつなぎ、明かりを「盗む」善良な人でもあったが、やがて平和な村にも外から開発の魔手が伸びてくる…。○月×日 ストリップ・ショーの一座、「さすらいの女神たち」(マチュー・アマルリック監督・主演)は哀歓に満ちた人生のロード・ムービー。「アジヨシ」(おじさん、イ・ジョンボム監督)は非情な闘病社会が舞台。韓国のイケメンスター、ウォンビンのかっこよさと、薄幸の少女役の名演技、キム・セロンに喝采。(内藤哲)